



それぞれの物差し
03

地球儀的な見方

文 肝付高夫

text by Takao Kimotsuki

湾岸戦争のころ、イラクの首都のバグダッドに、雪が降るのか？と驚いた人がたくさんいた。砂の嵐とか、照りつける太陽とかいった語句が頭にこびりついていたので、イラクは、炎暑と砂漠の国であって、わが日本の、はるか南の果てにあると思われるからである。だが、バグダッドは、北緯三三度二〇分に在り、これは博多市とほとんど同緯度である。

北緯四一度一分にイスタンブールがあり、これは青森市のやや北に当たる位置で、同じ線上に敦煌もある。そして、中国の洛陽は、大阪とまったく同じ緯度を占めており、また長安もそこに近い。日本列島は、北緯三〇度と四〇度の間にすっぽり収まり、朝鮮半島もその中へ、そして中国の黄河流域と揚子江流域もはめられる。更にこれを西へたどると中央アジア、つまりトルキスタン、アフガニスタン、イランと入ってくる。そして西アジアのイラク、シリア、トルコもすべて入る。この北緯三〇度と四〇度の間で、東と西が交流して、いわゆるシルクロードが通じていた。

世界地図というのは、どこでもそうであるが、自分の住んでいる国を中央に位置させて、これを作る。そして、それが、地図を読むものに錯覚を与える。

ヨーロッパの都市から日本へ向かう北回り、アンカレッジ経由の航空機は、グリーンランド上空を飛んでくる。その機に乗っているとどうして北東でなく北西に向かうのかと疑いたくなくなったりする。日本中心の世界地図で育ったイメージでは、アラスカは、ヨーロッパの東方に位置しているからである。

地図の中心をどこに置くかによって、世界を見る目が大いに違ってくる。オーストラリアには、北を上にしたわれわれがよく見る一般地図を上下にひっくり返した地図がある。それを見るときも、見ていると、オーストラリアとか南アフリカとか南アメリカが世界の中心的な役割を演じているかのような不思議な思いにとらわれる。欧州諸国の地図も、ヨーロッパを中心にかけている。サッチャー首相の時代に、イギリスがフォークランド諸島を攻撃したことがあったが、これは、世界の中心に在るイ

ギリスが、世界の果てにあるアルゼンチンをこらしめたとして喝采を得た局地戦争で、この平面地図が産んでいる観念のせいといえるだろう。

イスラムの地図にも、南を上しているのがある。これには、イスラム教徒の活躍舞台がインド洋方面にあり、南十字星を仰ぎつつ航海をしたからという説と、北極星を第一にあげるイスラム・コンパスでは北天が中心であるという指摘を根拠にした議論がある。

このように、平面地図は、さまざまの観念をとまなっている。そして、このような観念——先入観なしに客観的に世界を見るためには、やはり地球儀によるのがいいであろう。

平面地図を見慣れているとアフリカやアメリカの広さについて誤ったイメージを抱かされる。例えば、アメリカ合衆国の東西の幅は、東京ーカルカッタ間に相当する距離である。第一次大戦の起こった原因の一つに、ドイツの学校教育があったともいわれている。

ドイツの学校教材の地図に、アメリカとドイツの学校教育があったともいわれている。

ドイツの学校教材の地図に、アメリカとドイツがそれぞれ一ページずつを割り当てられていて、そのことに、学校の児童たちが、少なからぬ影響を受けていたというのである。つまり、ドイツとアメリカの一ページずつの地図は、人口、経済力、軍事力の総合的な国力で、ドイツ人はアメリカを対等もしくは軽視するようになっていたから、というのである。

ニュージーランドのロトルアにホノルル、ロサンゼルス、香港、東京までの距離を示す標示があるが、これによると、香港よりも東京のほうがかなり近い。実際に、その間を地球儀によって、糸で結んで測ってみると、そのことがよく納得できる。この方法によればアフリカの南北の距離が、東京ーサンフランシスコ間の距離にほぼ等しいということも肯ける。

国際化、国際交流、世界的視野などと、とやかく口うるさい世の中であるが、地球儀的な見方が、ますます必要なのではないかといってみてみる。

Profile

本名・東正知。1924年生まれ。

民間放送勤務の後、ホテル経営を経て、FM局創業。フリーライター。作家。文芸同人誌「原色派」(鹿児島市発行)準同人。

著書に「くらがりの煙草」「カルカノの觸感」「市長の晩餐会」「それぞれの物差し①②」など。